

第2章 いじめの未然防止

2 「分かる授業」を通して（中学校編）～対話的な学び、自己有用感を促す授業づくり～

1 授業で取り組むいじめの未然防止

中学校生活の中で、一番多くの時間を過ごすのが「授業」である。授業は、年間を通じて同一学級、同一学年内で実施することがほとんどで、それだけに友人関係のもつれやいじめにつながる芽が生じやすい。授業の中で、いじめを生まない・許さない姿勢や、いじめにつながる芽を断ち切るため、授業のルールを生徒と共有し、対話を通して自己有用感を醸成することで、いじめの未然防止、早期発見・即時対応につなげたい。

2 授業のルール

学級づくりと同様に授業においても集団を育成するためのルールが必要である。特に、複数の小学校から入学してくる中学校の場合、各小学校や学級担任によって様々なルールがあるため、生徒は入学当初の戸惑いから中学校の授業に適応できず、それが様々なトラブルの原因となる場合がある。

(1) 「対話」のルール

対話を取り入れた学び合いは、今後ますます必要になってくる。そのため、対話のルールを授業に取り入れ、相手を尊重して話す・聞く態度を養い、他者理解につなげることが大切である。特に、「聞き手」を育てることが重要であり、受容的に聞くことのできる学習集団をつくるのが、自己有用感を醸成することにつながる。授業を通して、適切なコミュニケーションの取り方を身につけさせることで、いじめ防止につながる。

| | 話し手 | 聞き手 | 話し合い |
|---------------|---------------|------------|------------|
| 基礎 基本 ↑ | 相手に体を向ける | 相手に体を向ける | 目的を理解する |
| | 相手の顔を見る | 相手の顔を見る | すぐに否定しない |
| ↓ 発展 応用 | 自分の考えをはっきり伝える | うなずく・相槌を打つ | 全員が同じくらい話す |
| | まとまりを意識する | 5W1Hを聞く | 違いをはっきりさせる |
| | 順番・個数を示す | 要約して復唱する | 合意形成する |



※このような掲示物を用意し、ルールを「見える化」することで、生徒も教師も意識しやすくなる。

(2) 「対話」を行うためには

「対話」は目的ではなく、手段である。ただ「対話」を行わせればよいわけではなく、「何のために行うのか」という必然性が必要である。教材研究を十分に行い、必然性のある問いを

教師サイドが用意することが重要である。

また、「対話」には、「拡散（広げる）」のための対話と「収束（まとめる）」のための対話がある。特に、「収束」のためには「合意形成」が必要になるが、参加者全員が100%合意する状況は考えにくい。その際に、安易に多数決などで決定とせず、少数派の意見も尊重し、互いの意見の違いとそれぞれの思いを確認し、合意を図るプロセスを生徒に学ばせたい。また、「AかBか？」というような二者択一の問いに対して、ディベート的に反対意見を切り捨てるのではなく、逆の立場の意見を「もし自分がAの立場なら、〇〇が～～なのでよい」など立場を変えて考えさせることで、「Aだが一部Bに合意」のような一部合意や、「AとBから新たにC」のような包括・統合案ができることもあることも伝えておきたい。

これらの「合意形成」のプロセスを、授業を通して学ぶことは、日常生活の中で問題が発生した際、解決に向けて生徒自らが考え行動することにつながる。

○「対話」を意識した授業 ～中学校2年生国語「走れメロス」の実践から～

| 学習活動 | |
|------|--|
| 導入 | 1 学習内容を確認し、見通しをもつ。 2 前時の学習を振り返る。 ○それぞれの人物像を振り返る。 |
| | 3 課題を解決する。 「走れメロス」の主役は誰だろうか。 ※学習形態を工夫する。 (個人思考→グループ→全体交流→グループでの再検討→全体交流) ※既習事項などを想起させる。 ※ホワイトボードや模造紙などで、考えを可視化する。 |
| 展開 | 【目指す対話の姿】 SA：僕はディオニスが主役だと思う。なぜなら、ディオニスは物語の最初 は人を信じることができなくて言っていたけれど、最後には「真実とは 決して空虚な妄想ではなかった」と人を信じられるようになったから。 SB： <u>なるほど、心情が大きく変化しているね</u> 。でも、私は心情の変化の回 数の多いメロスが主役だと思うな。 SC：Aさん、Bさんともに <u>心情変化に注目しているのは一緒だね</u> 。(後略) |
| まとめ | 4 まとめと振り返りを行う。 ※振り返りの際に、「気が付いたこと、分かったこと」や「どのような 力が付いたか」など、生徒自身の学びの自覚化を図ることはもちろん であるが、対話についても振り返りたい。その際に、対話の態度だけ を振り返るのではなく、「誰の意見が参考になったか」というような 影響・感銘・納得したことなどを書かせることで、他者理解、他者評 価による自己有用感の醸成にもつながる。 |

「対話」の大前提は個人の考えがあること。必ず、課題に対する考えをもつ時間を用意する。

進行役、記録役、発表者などの分担決めを生徒任せにしてしまうと、一方的に押し付けてしまうことも少なくない。あらかじめ教師サイドで人間関係を考慮して役割を決めておくことを基本に、グループエンカウンター的な要素を取り入れ、順番に役割を変えていく(例：「生年月日順に発表する」、「手のひらが2番目に大きい人が道具を取りに来る」)などの手法を取り入れると、班への所属感が高まり、他者理解にもつながる。

相手の意見を受け止めたり、共通点や相違点を見付けたりしながら、課題解決を目指す。

- 「対話のルール」を通して、受容的に聞くことのできる学習集団を育て、自己有用感を高める。
- “授業の中で人間関係をつくる”という視点を持ち、「合意形成のプロセス」を学ばせることで、“いじめにつながる芽”を生まないようにする。